

力強いパフォーマンスでオーストラリアに書のムーブメントを巻き起こす

書家 矢野仁（れん）氏インタビュー

オーストラリア政府公認アーティストとして活躍する書家・矢野仁（れん）氏。福岡、東京、そしてオーストラリアに拠点を移して 22 年、力強くかつ繊細な美しさをもつ作品は世界で認められ、ビジュアルアート部門で日本人史上初のオーストラリア永住権を獲得した。巨大な紙と筆を使ったダイナミックなライブパフォーマンスは、言葉の壁を越えて多くのオーストラリア人を魅了する。書道を軸に教室開講など活動の幅を広げる彼が Matsuri にパフォーマーとして出演するのは 4 年ぶり。パワーアップしたライブパフォーマンスと誰でも気軽に楽しめる書道ワークショップには注目だ。インタビューでは、オーストラリアに活動の拠点を移したエピソードや今年の Matsuri にかける思いを伺った。

書道人生は 7 歳のとき、小さな寺子屋から始まった

書道は小学校 1 年生あたりから始めました。家の裏が神社 でそのスペースで書道をやっていたんですよ。その当時はみんなそこで書道をやっていたので「僕もやろうかな」といった感じで始めました。まさか今こうなっているとはそのとき思いもしませんでしたね（笑）。

その書道教室はあまり長くは通わず、当時仲が良かった友達に移った書道教室に僕も一緒に移りました。その先生が今思えばすごく優秀な先生だったんです。その先生との出会いが僕にとってはラッキーでしたね。僕が高校に進学するタイミングで、その先生が同じ高校にちょうど書道科の先生として赴任しました。その先生は定時制の先生をしながら、奥さんが開いている書道教室を手伝ったりもしていました。奥さんは書道教室をやっていて、先生は公務員として安定していて、大きな家を建てていて、「この路線良いな」と少年の頃は憧れましたね（笑）。

憧れの恩師を越えるため、東京、そしてオーストラリアへ

その先生と全く同じレールを進んでしまえば、僕は先生を一生越えられないと思い上京して、東京学芸大学の書道科に入学しました。その頃河合塾でバイトをしていて、そこに芸大進学コースがあることを知りました。そこだったら直接書道とは関係ないけれどアートと関われるのではないかと思い、卒業後は河合塾の芸大進学コースで働くようになりました。芸大進学コースというのは、普通のコースとは違って朝教室に入ったらデッサン対象のヌードモデルや動物が動き回っているのが普通でしたね（笑）。

河合塾で働く傍ら、都内で個展は 4 度ほど行いました。でもアーティストの卵ってたくさんいるんです

よ。その中で生き残っていくためには…って必死に考えて、途切れることなくずっと作品を作り続けていましたね。その芸術大進学コースから事務課に異動の指示が出たときに「事務課にいてもアートには関われない」と思い、会社を辞めました。

河合塾を辞めたときはその先のことはあまり考えていませんでした。ちょうど河合塾の同期がワーホリでオーストラリアに行っていたので、僕は彼に会いに行ったんですよ。そのとき自分の作品の写真集もを現地の人に見せたら、その当時オーストラリアには書道を職業としてやっている人なんていなかったのでも意外とウケが良くて「これはイケるかもしれない」と思いました。帰国したら学生ビザをとり直してオーストラリアに来てしまいましたね（笑）。

ビジュアルアート部門日本人史上初のペシャルスキルビザを取得、そこから人生が一変

オーストラリアに来てからの生活は全く順調ではありませんでしたが、まずやってみてダメだったら日本でまた頑張ろうという気持ちでアーティストビザの申請に挑戦しました。案の定、周りの誰もが僕がアーティストビザなんて取れるとは信じてくれませんでしたね。ビザコンサルタントにも2名には「無理だと思います」とキッパリ断られ、3人目に「無理だと思いますが、費用が返ってこなくてもいいのであれば挑戦してみましょう」と渋々承諾をもらいました。

オーストラリアでは永住権をアプライするまでに、展覧会やワークショップを開いたり、文字の書き方を教えたりしていました。これはもうツテを使ってチャンスを得ていきましたね。

そういった活動も認められたのか、僕は4週間でアーティストビザが取得でき、平面アート（ビジュアルアート）部門の中では僕が永住権を取ったのは日本人で初めてでした。書家はオーストラリアでは珍しく、かつオージーの仕事を奪う心配もないというのも大きかったと思います。僕のビザ担当の方がちょうどホリデーに行く予定だったらしく、とにかくホリデーまでに仕事を片付けたかったみたいで僕のビザ申請も早く対応してくれました。オーストラリアっほいですよ（笑）。

オーストラリアでの生活はアーティストビザをとってから生活が一気に変わりました。オーストラリア政府が「この人はアーティストです。」と認めてくれたのですから、これは現地で絶大な信頼になるわけです。ビザが取れてから大使館にアーティストとしてイベントに招待していただく機会も増えました。

どんな芸術も必ずブレない基礎の上に成り立つ

書家は文字を扱う仕事なのでいくらそこに芸術性を入れ込むとしても、文字が読めなければ意味がありません。基本を無視して、勝手にアレンジすればそれは文字ではなくなります。文字を見る側が字を目

利きするために、僕がお勧めしていることは字の線と線の間にも生まれる「白」の空間を見ることです。もちろん字は黒で書いているので、みなさん黒に目が行きがちですが、上手い字は白の空間がうまくつくれているか否かで見分けることができます。

この空間を作り上げる力を養うために僕の教室の子供たちには、普通の白い半紙で、白い文字を残しながら周囲を黒く塗る練習で文字を書いてもらっています。これは人の顔を描くときに輪郭から描き始めることと同じで、輪郭って別に黒い線をつくるためではなくて、あくまで輪郭の内部にある白をつくるために描いていますよね？書道もそれと同じです。

この白を意識するということが僕がずっと大切にしていることです。ちゃんとしている書道家であれば基礎として白の空間は意識されています。無茶苦茶に描いているように見える世界的に有名なピカソが、実は絵画の基礎となるデッサンはものすごく上手いのも同じです。

唯一無二のアーティストとして、日本文化を伝播させる使命

書道はどうしても日本語の壁が外国人にとって大きいんです。なので僕はオージーには「木簡」スタイルの文字から始めてもらいます。みなさん楷書を崩したものが行書ってイメージありませんか？でも文字の成り立ちからすると楷書が実は一番あとにできた文字なんですよ。楷書は文字の完成系なので、ルールがたくさんあります。ルールが多い楷書より、「木簡」は自由ですし、一本一本書いていくので先ほど話した「白」を作りやすいんですよ。

オーストラリア人が日本文化に深い関心をもってくれるのは、在豪邦人の方々が真摯に現地の方々と触れ合ってくれているからだと思います。在豪邦人が今まで積み上げてきた信頼関係が大きいのは間違いありません。僕もオーストラリア人に対しては日本人を阻害せずに受け入れてくれることにすごく感謝しています。

Matsuri ではぜひ自分の書を夏の思い出に持ち帰ってほしい

Matsuri で来場者の方には、言葉がよく分からなくても「おおお！」と心が動き、楽しんでもらえるようなパフォーマンスをしたいですね。もともとライブパフォーマンスは知人の展覧会で依頼されてやってみたところオージーのウケがすごくよかったことをきっかけに始めたのですが、普段よりも「魅せる」ことを意識してダイナミックに動きます。先日キャンベラでパフォーマンスをした後に、剣道を30年続けているというオージーのおじいさんに「すごく魂を感じた」と言っていたんです。言葉が分からなくても、見る人には何かしら僕らの思いを感じてくれているんですよ。

Matsuri 当日はワークショップも開催します。コピー用紙と厚紙を使うので書道を体験したあとは自分の書を手提げにして持ち帰られるように工夫しました。そうすれば家にも飾れるし、夏祭りの良い思い出にもなるんじゃないかなと思います。オーストラリアで書家活動をしているのは僕くらいなので、やっぱり書道をいろんな人に広めたいという思いがあります。なので僕が良いパフォーマンスを見せるというのももちろんですが、みなさんに自分の書を持ち帰って夏の思い出の一部にしてくれるといいなと思っています。

インタビュー担当 : Hinako Chiba